

新原海軍炭鉱の技師 猪俣昇 いのまたのぼる

猪俣昇と言ってもどんな人かわかる人は少ないでしょう。私もそうわかっているわけではありません。実は次の辞令を見てびっくりしました。

『海軍辞令公報(部内限)』九七五号(海軍大臣官房、昭和十七年十一月一日発行)
○昭和十七年十一月一日

猪俣昇 任海軍技術大佐
海軍技術大佐 猪俣昇
補第四海軍燃料廠採炭課長

猪俣は戦争中に「技術大佐」に任じられています。海軍大佐といっても、戦闘に従事するのではなく、技術者としての役割というわけです。大佐は陸軍なら連隊長クラス。二千人近い部下を指揮します。同

じ日、「採炭課長」に補せられました。このポストは大佐でないと任命されないでしょう。猪俣昇の軍人としての階級を知り、ランクが高いことに驚いたわけです。

猪俣の名は新原公園の「新原採炭所本部跡」(写真)は現地に立つ文化財紹介パネル3」の記念碑に、歴代「業務課長」昭和八年四月十六日、海軍技師として刻まれています。発足より七代目です。

猪俣は欧米に出張して技術について学んだことで知られています。次は昭和三年に海外出張を命じられた際の辞令です。辞令は海軍大臣直々に出されています。名前の読み(カタカナ)は原文通り。

(海軍大臣から猪俣昇へ)
昭和三年八月二十九日 大臣

(欧米各国出張) 海軍技師 猪俣昇

出張任務二関スル件

貴官、欧米各国出張中ハ、主トシテ英、米二国ニ在リテ、燃料関係事項一般、特ニ有煙炭採掘技術、坑内外ニ於ケル運搬施設、及粗悪炭ノ有利ナル処理法ニ関スル事項ノ、調査研究ニ従事スベシ

右訓令ス
追テ、出張期間ハ約十ヶ月トシ、任務ノ細項ニ就テハ、海軍燃料廠長ノ指示ヲ受ケ、之力遂行ニ関シテハ、所在帝国大使館附武官ト協議スル儀ト心得ベシ

(海軍次官から外務次官へ)
昭和三年八月二十九日 次官
外務次官宛

外国出張員二関スル件

海軍技師 猪俣昇
右者今般海軍軍事一般研究ノ為欧米各国へ出張ヲ命セラレ左記予定ヲ以テ主トシテ英、米、仏、独、伊ノ諸国ニ出張可致候条此ノ旨当該国政府へ通牒方可能然御取計相成度
右申進ス

記

出発期日 九月中旬
乗船名 諏訪丸
出張期間 約十ヶ月

以上、いずれもアジア歴史資料センターのホームページで見ることができます。旅費は一万一〇〇〇円が支給されています。「帝国大使館附武官」とは日本大使館に駐在する日本の陸海軍軍人です。

無煙炭、有煙炭の区別が書かれていますが、無煙炭は燃やした時に煙や臭いが少ない石炭です。次に引用するのは近代デジタルライブラリー(国立国会図書館のホームページ)で公開されているものが、講演の際に、猪俣自身が新原海軍炭鉱は有煙炭だと語っています。現代かなづかいに直し、ルビを付しています。句読点も増やしました。

財団法人産業福利協会、昭和八年五月二十五日発行『工場安全の叫び』(昭和七年十一月 全国産業安全大会報告 第一回)

海軍炭鉱に於ける安全運動と其の実績に就て

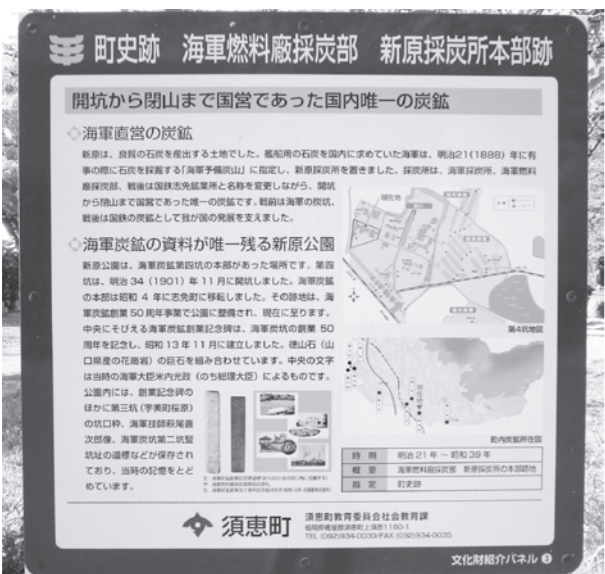
海軍技師 猪俣昇

*目次では「海軍燃料廠採炭部海軍技師」

一、緒言

茲に「海軍炭鉱に於ける安全運動と其の実績に就て」と演題を掲げましたが、我海軍で経営して居る炭山は二つで、一つは内地では福岡市の近郊にある有煙炭山で、他は朝鮮平壤にある無煙炭山であります。共に呉鎮守府管下海軍燃料廠に属し、前者は採炭部、後者は平壤炭業部と称して居ります。本日茲に御話せんとする所謂海軍炭鉱なるものは、前者即ち採炭部を指したもので、世間で俗に海軍炭鉱又は其の所在地の地名を冠して新原海軍と呼んで居るので、採炭部と云ふよりも海軍炭鉱と云った方がずっと世間的に通りがよいので、云わば俗名を掲げた訳であります。

炭鉱としては産額、設備、其の他の点に於て、他に多くの優秀なる炭山あるに拘らず、安全運動に關し比較的早くより之を実施したと云う点により、県当局より本会に報告すべく御推薦に与つた事は、海軍炭鉱として最も光榮とする所でありますが、菲才の私が、よく其の光榮に酬い、且皆様の御期待に副う御話が出来るか否か、頗る不安を感じて居る次第であります。(以下次号)



文化財紹介パネル



歴代業務課長